わきみず

お帰りなさい、ご先祖さま達

そして　遠くへ行っている
我が子、孫　親戚のみんな
ゆっくりして行ってネ。

今年もお盆を迎えます。お盆は、私たちにもっとも親しみやすい仏教行事の一つです。子供の頃、私はお盆の正式名称である「盂蘭盆（うらぼん）」というのを知らず、お盆に「ウラ」とか「オモテ」とかあるのかな？と不思議でした。皆さんはそんなことは無いとおもいますけれども・・・。

今回はお盆の由来についてお話したいと思います。

お盆のことを盂蘭盆（うらぼん）といい、正しくは梵語で「ウランバーナ」と訳し「倒懸」さかさまにつるされた苦しみという意味があり、このような苦しみを取り除く供養がお盆ということになります。

由来は、お釈迦さまの十代弟子の一人である目蓮尊者（もくれんそんじゃ）が餓鬼道におちたあろうに母は餓鬼道におちていました。「ウランバーナ」という苦しみを受けていたので亡母の苦しみをを救った因縁によることが「盂蘭盆経」に示されています。

ある時、目蓮尊者が神通力をもって亡き母の恩に報いたいと千里眼であの世を透視すると、ことも食べることができません。目蓮尊者は嘆き悲しみ、お釈迦さまに母を救う教えを願ったところ、「お前一人の力ではどうすることもできまい。お前のお母さんはお前にはやさしい、いいお母さんだった。しかし、我が子可愛さの余りついつい知らずの間に重ねた貪欲の報いで餓鬼の世界に落ち苦しみ続けているのだ。しかし七月十五日には厳しい九十日間の修行を終えて清浄になった僧達が帰ってくる。そのお坊さんたちに百味の飲食（おんじき）を供えて供養しなさい。修行僧たちは、ご先祖様や餓鬼道で苦しんでいる者のために喜んで回向（供養）してくれるであろう。そうすれば、その功徳によって、お前の母や、餓鬼道で苦しむ者も含めて、きっと母を救うことが出来るだろう」と教示せられました。目蓮さまはこのお釈迦さまの教えに従い実行してみると不思議にその功徳によって苦しみから餓鬼道の苦しみから救われたと「盂蘭盆経」に示されています。「お母さんが餓鬼道から抜け出し昇天する姿を見て、目蓮さま回りの人共々うれしさのあまり我を忘れておどり回って喜んだといい、それが今の盆おどりの始まりだといわれています。「ウランバーナ」に漢字を当てたのが、日本では盂蘭盆になります。目蓮尊者のお母さんは目蓮尊者にとって大変やさしいお母さんであっというのですが、それでは何故にやさしいお母さんが餓鬼道に落ちてしまったのでしょうか。それは、息子である目蓮さんにとっては優しかったのですが、実はその愛情は我が子さえよければ、他人の子はどうでも良い、我が子だけには良い服を着せたい、おいしいものを食べさせたい、という母であったというのです。餓鬼道に落ちたのはその為と言われます。私たちの心の奥深くひそむ欲望を象徴したのが餓鬼道の世界です。何かにとらわれ、しがみつき、ガツガツと迷い、悩んでいる姿をあらわしています。お釈迦さまが目蓮尊者に衆僧供養をすすめたことは、目蓮尊者の母が出来なかった布施行を母のかわりに目蓮尊者をして、行わせしめたのでしょう。

お盆号

発行所　普門山　林泉寺
三戸町斗内字寺牛25
〇一七九
二五―二八五〇
啓誠

「三法印（さんぼういん）」

（三つの真理）

シリーズで、お経・偈（げもん）文などの意味を少しずつ解説してきました。

前回はお釈迦さまがお悟りを開くに至った「雪山偈（せっせんげ）」そして「いろは歌」として詠まれて来たというお話をしました。

今回は　その三法印の残りについてお話ししましょう。

諸法無我（全てのものはひとりでは存在しえない、すべてのものは縁のおかげで存在する）執着を呼ぶものとは「我」です。「我」とは自分本位のことでいろいろな種類があります。

私たちは、ながれていく「もの」あるいは「こころ」を我がものとして、あてを作って、自分の尺度に都合のいいように考え執着します。それゆえ苦の世界を作り出してしまうのです。一切は無我であるということは我も、そして我がものも無と思える何ものも無いということです。全てのものは縁の寄り集まりというのです。人間の苦悩や争いの原因はつまり「我欲」です。人間であれば誰しも欲のない人など存在しないでしょう。けれども、その欲をほしいままにすれば、俺が俺がの貪欲となってあげくは互いに憎しみ争うことになります。ところで、その欲の対象である財産も、地位も、名声も死ぬときには全部この世においてゆくのであって、生きている間はあずかっているだけです。ののしった人も、ののしられた人も、儲けた人も損した人もみんな消えていくのです。

人間の欲を率直に読み上げた歌があります。「嫁は十八、わしゃ二十歳、頃は三月花の頃、減らぬお金が三百両、子供三人孝行、死んでも命があるように」、努力すれば可能であるものを望むのであれば、立派な願いとなるでしょう。しかし、願っても叶えられないことを願いはじめたとき、これは妄想となり迷いとなります。貪りから「愚かさ」という毒素が湧きだし、思い込みという知識から愚痴が出るのです。「痴」という字は、やまいだれの中に知という字が入っています。本当の字は知ではなく、疑うという字であるともいいますが、いずれにしても真実がみえないおばかさんの事です。

ここのところを諸法無我（一切は所有できない）とさとることが「有為の奥山今日こえて、浅き夢みし酔いもせず」ということになります。「有為の奥山」とは変わってしまううつろなものを、真実のものとして欲しがり望む愚かさです。この迷いの山を越えれば、煩悩の夢にうなされることなく、やすらぎの目覚めになるということになるでしょう。

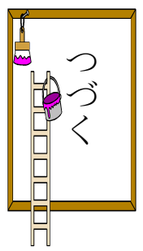
お釈迦さまは諸々の苦を消してしまうのを「四諦」（四つのさとり）として示されます。その覚りを得るために、正しい八つの道の修行「八正道」を示されます。

涅槃寂静（欲望煩悩に縛られた世界から解放されれば、身心は落ち着いていける）涅槃という言葉は簡単にいえばさとりという意味です。つまり、自我以前の世界、自我を超えた世界といってもいいでしょう。人間存在とは、無常、無我、四苦八苦を生きています。この真理から出られないとしたら、そこに腹をすえて生きていかねばなりません。

道元禅師は「仏道をならうは自己をならうなり。自己をならうというは自己をわするるなり」とされました。見るものと見られるものとの対立関係にある「我」の欲望に執着しなければ、もだえる自己はなくなります。それが、悩みにとらわれないやすらかな人生であり安楽となります。

今回で「三法印」の説明を終わらせて頂きます。

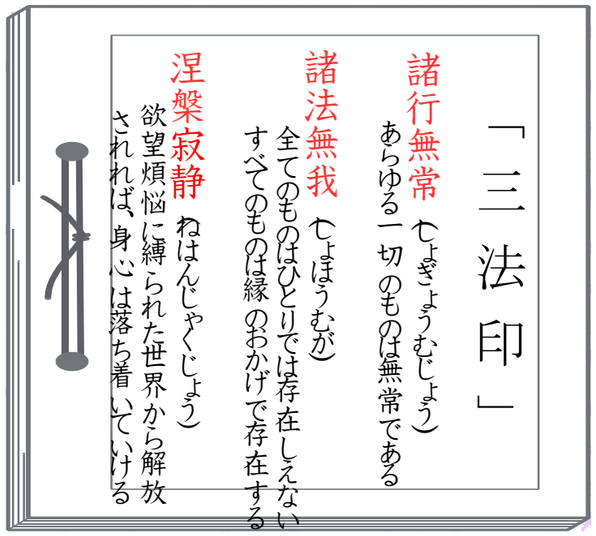
次回はどんなお経になるでしょう



諸行無常（しょぎょうむじょう）あらゆる一切のものは無常である

諸法無我（しょほうむが）全てのものはひとりでは存在しえないすべてのものは縁のおかげで存在する

涅槃寂静（ねはんじゃくじょう）欲望煩悩に縛られた世界から解放されれば、身心は落ち着いていける



むがし話っこ

ーえん子角良ー

斗内にある、農山村開発センターの西北方に、白い肌をした断崖が見えます。ここを「えん子角良」と呼んでいます。以前は、この角良の下を鹿角街道が通り、街道に沿うように熊原川が、水かさも多く渦まいて流れていました。

月の明るい霧の夜などに、この断崖の上に若い娘が姿をあらわして、黒髪を櫛でけずっている姿が見られたと言います。この娘は「えん子」と呼ぶ、美しい娘でしたが、家は貧しい百姓家でした。その娘の「ゆうれい」なのです。それで、この断崖を、「えん子角良」と呼ぶようになりました。

えん子は、同じ村の与市という百姓家の若者と親しくなりました。星の出るまで働いた当時の百姓でしたが、仕事が終わってから二人は、月の晩などは、角良の下でよく話し合っている姿が見られるようになりました。

えん子は、なかなかの美人でしたから縁談は方々からありました。しかし、父や母も、与市のまじめな人柄ど働きぶりを知っていましたから、二人がいっしょになることは、はんたいではありませんでした。けれども、そのころの百姓は、家に一人の人数が増えるということは大変な事でした。嫁入りすることは家族が増えることなので、与市は、出稼ぎに出て金を貯めて来ることを決心しました。

「えん子、おらぁ松前の方さ、かへぐにいってくるじゃ」

「いつごろまで、いでくるがえ。」

「一年ぐらいで帰って来てぇどもよ。」

「ほんとに一年で帰って来てなぇし。」

えん子も事情がわかっているので、反対しませんでした。いままでのように会って話すことも出来なくなって、さびしいけれども、少しの間の辛抱だと、えん子は心の中でつぶやくのでした。

「からださ、気をつけで、いってきでなぇし。」

「うん、おまえもな。」

こうして、与市は出稼ぎにでてゆきました。

えん子にとって、一年の月日は長いものでしたが、仕事に追われている百姓には一年はすぐ過ぎてしまいました。

えん子は角良の下に立って、与市の帰りを待ちました。

約束から一ヶ月すぎ、二ヶ月すぎても与市は帰って来ません。このごろ「えん子」は顔色も余りよくなく、ボンヤリと三戸の方を見ながら、角良の下に立っている事がよくありました。。

「与市さんが、他国の人と一緒になって帰って来ないのでないか。」と、フト思うようになったのは、二年もすぎてからです。

サァーッ、与市さんは帰ってきません。都会の方がよくなったのか。それとも、たんまりお金を稼いで、よその女と一緒になったのか。

それとも？なにか別な事情でもあったのか。

待ち焦がれるえん子・・・。

ーつづくー

いっぷく

我を出すな
舌を出すな
精を出せ
祝い事は延ばし、
仏事は取り越すもよし
されど吉凶に
心迷わすな

※祝い事は慎重にして遅れてするくらいがよいが、仏事は反対に早めに繰り上げてする方がよいといわれる。しかしそれにしばられるのでは意味がない。

施食会のご案内

八月十四日（木曜日）
午前十一時より

本堂に於いてご供養します。
供養料　一千円以上
同封の申し込み用紙に
お名前を記入し
供養料を添えて
当日本堂受付まで
お持ちください。

※尚、当日お出でになれない方は前もって、随時受付いたしますので、どうぞお申し込みください。

着々と和尚への道を歩む
― 拓郎和尚 ―

修行を終える

平成二十三年の八月に出家得度式をし、正式に僧侶の仲間入りをした後、平成二十四年の晋山式の時には長老になる儀式、立身、法戦式ともいう儀式を終え、平成二十五年の三月に札幌中央寺専門僧堂に修行に入りました。

僧堂の山門に下がっている木版（もくばん）というものを三打して、「御開山拝答並びに免掛塔（めんかとう）よろしゅう！」と大声で入山を冀（こいねが）うのですが、なかなか許してもらえず、立って待つこと二時間から三時間という場合もあります。そして、やっと係のものが出て来たかと思うと、「なまえは？、どこから来た？、何しにきた？、修行とはなんぞや？」といろいろな問答が始まるのです。

問答も終わり、個室に通されます。ここからも更に大変で、食事、トイレの時以外は、坐禅三昧です。線香一本消えるまで坐り、正座して少し休んでは又坐る。これを夜の９時まで繰り返し、約四、五日間続けます。基本を習い、やっとの思いで、大衆（なかま）のいる大部屋に移り、修行に入るのです。

緊張、厳しさ、仲間との関わり、大衆一如。「修行とはなんぞや？」答えはあるのだろうか。答えをみつけられるのだろうか。

まだまだ続く修行。

この壁掛けいいでしょ？。

なんと、寺で毎年配布しているカレンダーの挿絵なんです。

ある檀家さんのお宅に用事があって伺ったら、三枚ほどの額が壁に掛けがありました。

「どこかで見た事のある絵だなあ」と思いだそうとしていたら、「お寺から頂いたカレンダーの絵ですヨ、ただ捨てるのではもったいないから。」とのこと。なるほどと思い額縁はどうしたのかと聞いたら、ダイソーで216円で手に入るとのこと。

早速、わたしも10枚買い込みカレンダーの部分と絵のところを切り取り、額縁に入れてみました。ごらんの通りのできばえで見事です。

庫裡側から本堂に入り、新位牌堂側の水屋の所の壁に掛けてあります。

みなさんもやってみてはいかがでしょうか。

朝に感謝

朝に感謝　夕に報恩（ゆうべ　ほうおん）
生きるよろこび
生かされる幸せ
ありがとう、おかげさま、合掌（がっしょう）の生活
心が安らぎ（やす）
吉祥（きっしょう）の出づるところ
先祖が眠り（ねむ）
子孫が集（つど）うところ
それが　お寺の本堂です
御仏壇は我が家の本堂です
心をこめ
お仏壇や本堂におまいりしましょう